慶長見聞書

二

御家

内閣文庫	
和書	
類	三三一二四號
冊	五
函	一五〇
架	一三

内閣文庫		
番號	和	35124
冊數	5 (	2)
函號	150	65

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
裏面記載のない箇所は省略

国立公文書館
National Archives of Japan

一七月六日伊勢ニ人数ヲ出サレ安濃津相
剃髪ス安国寺長宗我部長宗大義失ル
ラレテ二万人余論ヤ
一水口城長束伊賀守入置
一郡山城羽柴中郎守相拘
一津城羽柴下総守在城
一京名城氏家内侍播磨
一大垣城石田治部少輔居城

加勢人数之事

一福葉右京亮　羽柴長吉　義長書状

加茂左清ゟ　ゟ之　後殿ゟ之

一味方　於名古屋ゟ七百余船や

一同野津ハ富田信濃ゟ渡る元相抱

一同　松坂城ハ右田岳記相抱

一同　長島城ハ福島掃部助居城ゟ以押ゟ

信記ゟ方ゟ承渡ゟ大田山城ゟ陣や　仁三日

一今尾城ハ市橋下総ゟ居城ゟ以押ゟ

八幡ゟ清水ゟ切ゟて長陣や

一七月廿一日　滝川信濃ゟ松坂城ゟ押寄ゟ城ハ

右田ゟ城ゟ七百人ゟ於水同ゟ富田ゟ相抱ゟ

一同日ゟ長ゟ城福葉部人ゟ勢九百六拾人ゟ於長

九鬼大隅ゟ町ゟ之ゟ懸ゟ一ゟ富田ゟ相抱ゟ同

敵ゟ数ゟ追ゟ上ゟ長九鬼大隅ゟ城内安房ゟ

以下部ゟ流率ゟ尾州ゟ刈ゟ雑浦ゟ焼拂

漁人村老男女僧俗ハ不限切捨撃殺箱根関ハ閉ル
尾州毛呂湾ニ来ル浦のうらの関ハ近ク江戸東
ハとなりて其間敵とたゝかふ矢さきを以て用ル人送ル
松平忠信ハ相ハ小田原ニ来ル楽のうらハ先陣
一夜の間ニ敵ものゝさきけ大野義たゝかふ三浦
了旗を立て進ル方敵弩を射せ三浦
松平忠信小田原彩九郎同安義ハ江戸ハ
上ル間ハ敵駆るきこゝたのきよ右ノ海と
浦くハ悪りの天罰ハ此ハ高ハの大将ハ
きくをと援ハ皆たへきて戸ハ家の名敵
業なくて引ハ分の敵を討て北ハの
者を射ハ射ハ事ハ
一時戸間三郎右馬ハ法橋ハ大神ハこゝへハ
ハ敵ハ防ハ敵ハ
一関東方ハ諸城ハ月初日ハ小田ハ三日十日ハ尾
法師法橋ハ家康ハ御出馬を

相模守江戸ヶ村越義助と申仁ハ
何家ニ成ル大臣ニ成ル事ハ
ともいたされ味方の御援ニ高成ル
後ニ江戸ヶ高ニ成ル方ハ一方後
日ニ成ル後ニ出馬ニ成ル仁ハ
合戰ハ宮島何家可ニ成ル村越ハ八月
十三日ニ江戸ヶ立同ニ九日清須ニ着ス此ハ
井伊兵部少輔中將三河後ニ変ニ成ル人数ニ

ハ、今ハ成ル方ニ成ル方ハ
ニ成ル事ハ江戸ヶ成ル人ハ
御家ハ一ツ成ル方ハ
加ヘ成ル方ハ義助ハ
家康ハ討陣ハ若ハ
成ル方ハ兵部中將ハ
四度ニ成ル相模ハ
辛分ニ成ル方ハ

ハ、同浦ヶ成ル方ハ
ハ、人ハ
角ニ成ル方ハ
ハ、大名ニ
ハ、四ヶ人ハ
ハ、通ハ分別者ハ
ハ、結ニ成ル
ハ、大名ニ

家康公御の儀を二心に成さる様に今迄
かねて思惟無之事に遠慮なくとも思召
り加藤左馬頭殿同早速山内對馬守殿一同に
とこと以合点なく変心致候
一福島左馬頭殿より京摂等波乗近国に
打て出高名と相待居候に大山に指向う波乗
義の儀申上て大山に残せ置り三時
程遠く敵の跡を追切て波乗を攻落へ
し

波乗を攻落さるはは大山の敵は已と退
散すへしと被申候に付て同日明後廿二日
寅の一天に大山城を可攻と諸軍
に船けるの業仕事大山に関に対れ
伊東對馬守義人数方の心腹波乗表の切り
中に谷間をとこと合くるを以て福島左京亮
同義六同早速攻落る加藤左馬頭殿波乗を
へ向ふ

一関東方ハ福嶋左馬大夫よりうく萩原之越
河渡の瀬をうち越火の手をあけむとの約束之
此組の㞐加藤左馬助黒田甲斐守京極丹後守生駒
讃岐守其外諸勢と二立と相談小方の瀬ハ
池田三左衛門并参河遠江守駿河守浅野左京大夫
等ハ押へに居みて又は萩原の瀬よりお
こし此瀬をうち越岸火よりハ一時川と
河田の瀬つ越一越よし相定池田三左衛門は

中表敵と不討合しけるにおさへの人数に成す
北表つらこ細川越中守井伊兵部少輔本多中務少輔ハ
我家両人も押への人数にて〻きを友と振の
御勝ともお思ひ自身の働をと御入候似合
ふかれ由緒よりの押へ小相定尾州
福嶋左馬大夫　羽柴越中守　京極侍従
川下越人数割し候事
黒田甲斐守　加藤左馬助　藤堂佐渡守

田中兵部少輔　井伊兵部少輔　大久保中務大輔
河嶋廻し流他邑ハ尾張ノ国付流なりし今度
ハ福嶋ニ付川を越何ぞえらすして粉骨ある名
あらしも人数ハ
稲葉市左衛門　武藤掃部　津田新十郎
沢井左衛門　平井源左衛門　平井兵左衛門
安藤又三郎　生駒隼人　小林十郎解由
林藤十郎　小坂助六　堀田小三郎
安井将監　堀田将監　吉田平内
八嶋右十郎　武藤清兵衛尉也
一 抑岐阜中納言秀信ノ敵ニ御一味ありし事ハ
此秀信ハ関東へ下向し御供ノ内也去七月朔日
打立一日ニ右宮部中ニ解しく此家中風
流と皆うして東の濃尾道らん世のたをりて
かゝるありけつらうしくうと事とらさしかは
上段ニ上総やなかる事支段龍が隻十日斗

延引ニ成共同心法論帰り河瀬方ニ暫ク度と
して見物秀頼公御法度を重ねて
家老の法遣ト而引続き談合ハ本遣
ハ先一往ハ家ニ返ると申なれ
遣ハ申ハ一往ハ心合長法論や見分ハ返事
ハ如何ハ返答ハ無ハ申いつまし計り
同て不意使ハの家老意や和遣と而しと
城中ハ心遣ハ而ハ法論由ハ上ん地変り

秀信の出馬入江九郎左衛門達手為ニ為一往ハ
ひそかに御部ハ呼集め重ニ相談を法論ハ一味
可致ハ相定自筆返事ハ法論方ハ出
日朝日家を出発ハ御一味ハ而
竜城用意ハ仕と云御帰ハ而
徳院ハ十四ハ達の加藤の大事を老臣に
くしの業後会ハ呼ハ徳院を奢
初夏ハ関東ハ一味のとハ下りハ由

戸江合ハ又引返し上方ハ一味相し人も多く
被下なり口ハ大くて御下の用意可仕
と申なり諸人ハ大ハ西ハ中国ハ長崎
迄和泉ハ堺越前ハ敦賀ハ江戸ハ浦賀
ハ多し引合ハ今浪人送りける船ハ後
ハ此事ハ内々ハ家康ハ仮名ハ源太郎
ハ大ハ家康ハ関東ハ
御下向ハ成ましと成の内ハ江戸ハ
時来ハ江戸ハ自ハ浦ハ指遣ハ見ハ
浦ハ浦ハ新ハ関東ハ御下向ハ
ハ海ハ秀信ハ運の末ハ一番と方一味
四国ハ切ハ竜城ハ用意ハ
一浦ハ浦ハ大地ハ陣ハ
ハ方ハ陣と云ハ楽田村ハ
海津ハ庫ハ海道の南ハ大坂の
ハ根村ハ家康方ハ尾生陣ハ

扨下右之事や後ハ水野右馬之助

一美濃岡福寺ハ城ノ丸毛三郎之兵ハ竜ヶ岳ニ居て
大垣の城ハ吾報のもの之ハ後詰の用意
ゆゑ也ハ右の小笠原長清の孫兼丸毛三郎兵衛尉
長照ゆゑ也中し更濃の地侍ハ波多野
秀俊ニ甘後ハ信長ニ随ひ前ハ多野の人ハ
家ニ尾張岡本目ニ六所ノ横井伊織助と
云者ハ也ハ右の小笠原の末流ニ而久安元年ニ
居住し代々ハ小和を名乗り共間迫而ハ代し丸毛と
和ハ也横井ハ関東ハ中一條ノ内丸毛ノ親
族丸毛ハ和と申者を招き門客ニ隆ゆ
一説ハ天文年中ハ三郎兵衛ハ和泉守ニ
源ノ義村ハ代ハ吾報万事大将ハ為ル
ゆゑ人ハ一忽ニ離て敵ハ組し泉ノ浦ハ
ゆを失せ」事侍の知言ハ有ハ吾報の
事聞まし之耳を以ハ度迫言ハ

力あるゝ者ハ伊勢ハ徒歩ハ清水方ハ池ノ内
同八月十六日市橋下総守徳川清水橋井伊勢
助同名孫兵衛同伏見ハ長谷川藤兵衛
等ハ向ひ合ひ九月三日清水方ハ長谷川藤
左衛門ハ宇治ハ浦ハ又治部少輔方ハ加藤の
人数ハ彼是都合弐千人ハ有ましき村ハ云
所ハ人数ハ出し大御所ハ浜松軍ハ
其日ハ寄しけるハ市橋内匠頭手兵
竹内ハ帝ハ寄ハ此所の北ハ小ハ東門ハ
あまし八月の末ハ十六日の夜ハ門ハ
遮断ハ大や小村ハ此のハ入ハ而ハ
出林ハ人もあし幸ハ家ハ火ハ放
焼ハ者ハ生ハ役ハ向ひ共ハ焼ハ
られ敵後ハ立春ハ敵ハ取ハ行先
或ハ加賀の方ハ向ハ清水ハ横通ハ小ハ向ハ
引退ハ城大坂ハ引ハ九月八日甲州道ハ

一諸打る福決御忠引務る戸板徳永門を
越て退打る是を打れ徳永より前に戸板
より前に三十六打れすくに福決御に押寄られ
九毛門西脇かに寄つ又る福決者に三人御み
張りてもつて門を開て大合戦しく
板を双く討死を手負は九毛八御を捨て引
へ打る大村に落りけり戸板御と宗元百
ヶ所を重り九毛八合戦敗して後に加賀に寄

人してもつて中まわ
一福決寄変西則西変法に打ちん五十二百騎
行て打西三二尾に来り戸板に出合て後の御と
武略よて宗元一ヶ所西に法に徳川法に
ヶ法ヶ門源市九寄ヶ者に加村宮御隠
に出家トを御度門府板に後宗元に吳又
ヶ御いつ京度る西中に陣に陣をける
ば又る頼ちく一家岡心に御に後又ま

言葉もなく一矢射て後より陣屋に
なしかの拙は徳川方の狙撃に
出て西の方の押寄せ
玉と西の方の鉄砲打合
加賀侯徳川大御所押寄せ時つかつて西の
御戸口明退城と流し一度ひとしきり合
戦同八月九日徳川法華松本に寄
よせる福島加賀守殿寄手模
井伊掃部頭殿寄人数向
高台徳川法華

方と思ひ夫迄より合戦八法華下の家老に初
とうとうとと加賀の方事なき寄
城を志つまりて矢の一間とふ射出
理とうく御同に押出り西口にうけ入責
徳永に成もしうして三本家老河瀬平兵衛
ついて徳永門の村志摩つ法を合戦孫
八横井伊志摩ら法を合戦河の村平兵八二九日
加け入をうと打たり首とを徳永掃部助

もと員福業外記百田長兵衛いつまもしきしく
打立られ清水掃部介こうまを指長ゝ清と会德永
庶右と員引退て中京屋八徳ぬれる
一人を二番打れるゝと清と申くて家を出る
福島ゝとゝゝ見物の小勝り大勢ゝを
出るとせいして引退れ和れるこうまを引付
城と門ゝ引面ゝ引退く德永元入智を城を
守る兵後三郎宰人して出張ゝ城尾

家中ゝ出ゝ
川と河内の渡可越人数八
浅田三九郎厨　清野左京亮　ゝ馬主書
山内對馬ゝ　松下右兵厨　城尾濃守
一柳監物
一福島下の先ゝ元茂様渡りと打和西英濃
より打出ゝ長屋を出し焼拂ゝ出ゝしの清と
と打和を良と見と焼火ゝ夜八ゝ良焼ゝ

物と問し八月廿二日暁に高戸と打込波乗を
下り陸とする波乗守中納言秀信川村図書
党と出張をしてうつちの城を攻落す命
百越中守(イニヲ)味造大書を出るをうして
彩知網忍られ〜防戦を勝二子計に八をさら
けて沈田三九郎萩原ロのお守は煙とうく
河戸の浦さを打込三九郎ハ伊勢浦乗
先陣や思ものを陸を一柳豆初や豆初代

迫而を知りして此北の案内たるかよりの下の二段の
下の一書越入(家ヲ焼ノ浦ヲ上ル)敵は後に見て城中ヲ
後地をを防戦ス萩田拵九郎一書に切て出
討死一柳内大隈拵支と支と合薙刀首
を打ル大隈を又仮浦小勘平せり合拵支
討死沈田陣中ヲ沈寄小勘平を討ル武市
内九郎と名乗討死首を一柳元討ル
小河萩原茶田十九郎を初て二百余人討死

城尾兵部少輔殿ハ傷ヲ負ひ三月廿五日
頃ハ所ハ混乱して河ヲ越ントの事ニ越後
迄敗軍ハ田ニ入ル浅野ハ京ヘ上ルの事ニ越ハ迄
九鬼ハ伏見ヘ帰りけるハ迄ハ敗戦ニ成ル
終ニ敗軍ハ津田蔵之助殿ハ之者赤母衣ヲ付
殿して退り金松又四郎殿ハ黄母衣ヲ先ニ進ム
蔵之助殿ハ注ヲ合ス敵ハ戦ヲ名乗ル勝
負ハ分ル大将軍秀信

ハ伊勢川ヲ村ヲ乗ニ引ヲ陣ヲ主ル
波辺方の侍者ハ三郎殿ハ之者中納言ニ
ハ引ケるハ新ハ敵勝ヲ大野川ヲ越ル
書ハ味方敗ハ中ハ
小野ハ五十ハ先波辺ハ川ヲ城ヲ防戦
可ハ宮ハ所ハ河島の口ニ引ハ退ル
敵ハ追ハ城中ハ仮沼女人
殿して悲めり波辺ハ引入ハ時ハ村ヲ

敵意にて候間津田左馬殿弾正殿
又如何のおそれ淀川本一中務殿左馬殿
屋敷を退し却て安藤殿
ゝゝより城に入込宮内に浦方より人数を
分て楯籠り山に出張して柳原左馬殿同ゝ
門脇門淀九郎助相国寺衆三十余人義を
淺野殿家来一書に押寄アリ敵はうしてより
清水将監と云者却て出くるゝを合引
淺野殿帰時より宗法法師門美浦彩左馬殿
俗三帝元頼働やく但淺野殿帰帝
者一書宗法討死之信義左馬殿又宗長
同宗法三人討死之ゆえ淺野殿
兵部長国越中守加藤左馬殿和おゝゝ
攻寄ける比元ゝ山ゝ中智井伊
竜左衛門殿柳原ハ討死を門瀬左
何ゝを城に入ゝ退てり赤尾宗ハ

柏原義宣殿ハ討死ニて嘉兵衛ハ
てきと詞を無しかるゝ岡入退ス赤尾ハ
殿り防戦ス川瀬ノ内の作兵ヲ殿ノ井藤宣
ハ引退て死ケるしゝ切て出り防戦一ツ切死
赤尾ハ源ヶ貫敵ヶ一ツ引落ケるハ月たゝ
のこの刻ノ作ヶ宗破ヶ柳原又ヶ一ツ引
討死ヶ川瀬九郎ヶ作ヶ出ヶ城ヶ入ヶ波ヶ
岡ヶ長海ノ宗ノ作ヶ倉ヶ助ヶ

一同八月廿二日夕刻福島大清水ヶ
城中赤松政則ヶ毛屋岡ヶ城ヶ
友ヶ長波ヶ岡中ヶ城ヶ中村井戸ヶ城ヶ
の源ヶ兵ヶ衛ヶ作ヶ志ノ城ヶ松浦ヶ友ヶ
并ヶ毛ヶ打掃ヶ城ヶ梶川ヶ中ヶ村ヶ城ヶ池ヶ尾
城ノ河ノ西ヶ宗ヶ井ヶ築ヶ柵ヶ
打ヶて出ヶ赤尾ノ河ノ東ヶ
押ヶ出ヶ川ヶ瀬ヶ井ヶ村ヶ

迷たけがゝ江へ引ゝ女九ゝ女九ゝ浦ゝ市ゝ兵ゝ二ゝ尼ゝ毛利
掃部頭殿ゝ三ゝ郎ゝ殿ゝ村ゝ上ゝ兵ゝ庫ゝ頭ゝ殿ゝ毛利
平村ゝ より ゝ 宗ゝ 紙ゝ 也ゝ 悪人 数ゝ 行ゝ 者ゝ 掃部
城ゝ の ゝ 方ゝ と ゝ 海ゝ く ゝ 寄ゝ る ゝ 所ゝ 福ゝ 島ゝ 左ゝ 衛ゝ 門ゝ 毛ゝ 利
掃部頭殿ゝ三ゝ郎ゝ殿ゝ方ゝ に ゝ 海ゝ 手ゝ と ゝ 上ゝ 陸ゝ し ゝ 寄
ゝ ゝ 人ゝ 数ゝ 二ゝ の ゝ 尼ゝ と ゝ 所ゝ 波ゝ に ゝ 女ゝ 九ゝ 手ゝ 分ゝ し ゝ く
大軍ゝ ゝ ん ゝ 鞭ゝ 姿ゝ 責ゝ よ ゝ せ ゝ り ゝ と ゝ い ゝ つ ゝ も ゝ や ゝ く ゝ か ゝ い
後ゝ し ゝ 早ゝ 打ゝ に ゝ 宗ゝ 紙ゝ 事ゝ 不ゝ 成ゝ 辰ゝ 刻ゝ 分ゝ

中のさうつよ ゝ く ゝ 女ゝ 尼ゝ と ゝ 持ゝ よ ゝ 抜ゝ き ゝ 女ゝ 城ゝ よ ゝ 海ゝ 手ゝ
ゝ ゝ ゝ 三ゝ 郎ゝ 殿ゝ 方ゝ 人ゝ 数ゝ と ゝ 義ゝ 討ゝ 死ゝ 仕ゝ り ゝ 手ゝ 海ゝ 城ゝ 出ゝ と
ゝ ゝ 寄ゝ 切ゝ 腹ゝ す ゝ 者ゝ 多ゝ 何ゝ も ゝ 陽ゝ 高ゝ て ゝ す ゝ の
役ゝ に ゝ 取ゝ り ゝ や ゝ く ゝ 示ゝ ゝ 合ゝ ゝ 西ゝ 宮ゝ 合ゝ ゝ 新ゝ 川ゝ 酒
ゝ ゝ て ゝ 敵ゝ 軍ゝ 敗ゝ 小ゝ 陽ゝ 殿ゝ の ゝ 寺ゝ 高ゝ 城ゝ ゝ 用ゝ 出ゝ 来
陽ゝ 高ゝ と ゝ 名ゝ 見ゝ を ゝ 付ゝ て ゝ 大ゝ 敗ゝ 我ゝ い ゝ つ ゝ も
大ゝ 勝ゝ て ゝ 城ゝ に ゝ 成ゝ る ゝ と ゝ て ゝ 自ゝ 分ゝ 打ゝ 手ゝ 三ゝ ゝ の
卯ゝ 打ゝ に ゝ 掘ゝ 切ゝ と ゝ 清ゝ 合ゝ 攻ゝ 寄ゝ る ゝ 掘ゝ 沼ゝ 一ゝ 柳

いつもしも押まつと大なるのあるをしてを流るゝ
所の名に先をせるもの事 口碑あるとの
先なる八代方にてをつを一命にかへてを大なる流れ
つる浦にて切りつる溜井下堤につゝり七曲を攻
とん 此波年の堀は東南八溜田式八苦戦をしへ
ゝる雖而あるふはおゝの切畑あり 此二方八
つをさく馬引したるゝ雖通 面の方八七曲
あるのをりて大なる橋なる三節のあるをしをんをる

堤国の堀や大野つまりくゝよりあゝは中くゝ丁麦
やゝをあゝ 沖田三反馬高塚素門若し橋なる
川を流すゝ道を注くゝ水れなる七曲を麦寄る
京極清次を一書に寄くゝ京井洞 鍋田溜堤喜
家なる麦に河原に攻寄れん 溜溜八大なる寄れ国名
御書る梅田新助ふかけ入ゝ捕言る名ス 山下出厳
の新し 溜友三郎切て出くせり合 本遠
友遠佐ゝ元 百人斗 法を双て七曲なる寄てを

防戦ハ福島の方ハ大隅義高なるべして
疵を蒙る内内平野又ハ高橋首を苦に
落し又敵よせり合こる内ハ増田ハ
津田義三郎仮沢きたる内角内伊義長ハ稲葉
竹市長清大野長ハ内田治高ハ角
切て出り切合ちらし合る内ハ山下九郎右衛
門国綱中内ハ長谷部三郎兵衛ハ敵を
合ハれ敵を味方ゑらけ分敵を打ハあけ
門の前ハ福島の侍治太兵衛山とよ
ハ敵の強をうきとむすと云分組合ける
中所中落けるを侍衆の渡ハ
者助左ハ一住ハ
まてもなと敵の首を取て部ハ
侍ハ高ハ二ツ
ハ敵彩ハ
ハ討死ハ長岡藤四郎
沢村ハ討死ハ
者ハ

[illegible]村おもく[illegible]ひ[illegible]運をはこぶべきよう名いたし
福島流左村又左衛門まいたんにて〻〻あけ〻〻門を
押込て則[illegible]の矢ぐるしく敵とり矢ぐるの敵も
切合て彼矢倉と楽矢さ海の我指物を立出し
けるの同家中波多野秀治を海に楽つゝいて入同尾張集人
もいたくわて楽海集人[illegible]人[illegible]のりてもをを
見ると申せは集人服立て海を一杯よあ〻した
と云る言して楽と城方に波多野秀治留守
芦田底三郎滝川平一郎中島信九郎中井源八
大鬼九郎助平よき兵三百討死ス二の丸の
門ヲ外ヲ押開く門おこ[illegible]敵色をあけて
[illegible]つ[illegible]あり入城巻て沢田三郎
[illegible]九[illegible]ことを[illegible]をあけ入一番乗と
つゝわて楽る、滝野[illegible]家[illegible]中納言秀信公の
門[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

三度父をうたれ、木曾左馬頭うたれ名をあらため時長
とてもらく古ひよけ河路来一統のよしあ
りき秀信ては武士の戦場にかならずと
きはれ事ある様にて一旦先誤とし失事を
思ひ立所海にある旨に滝らせ今更案命相しむる
例ようこそましかるも再三すめさらは是彼の
合戦に粉骨をはらふしお勝たる志気の一命
をただしくなきためみ自害と此路来にて有由

に江戸城にて没し一天下分け必定と云ふとれ
も時の北条勢失なうめにて御跡中納言殿料様と
これも世一筆宛感状を書為申存す柄の老若に
給てけるを忘却の時より云ふ天下の身ならて
書にてあるましき御世を世かみえあいをとなかり候
此時ひとつよ侍三揃五人浪戸か浦か勢氣
河瀬左馬助大摺苫大刀以下ゐると三揃八人
ましん拾る池田三左衛門宰相殿中納言とかきき

[illegible]加納村の住民の擬[illegible]屋敷に入拾
[illegible]人の小姓[illegible]助武[illegible]
[illegible]けいこの武士は[illegible]
波阜かと加納村を通[illegible]
中納言殿波阜のと示カキヤノ用正寺にて出
家入道を叫るのたのしきとの義とする[illegible]
波をあらしけるうれしく尾州に[illegible]
いろり送り[illegible]武蔵助子帥[illegible]中書

[illegible]殿所[illegible]ハあろ川を[illegible]小の山より
落り[illegible]城の老[illegible]あるいハ討死あるいハ
あろ川に逃入水におわれて死[illegible]
云数を[illegible]八月廿三日[illegible]午刻に落城し則
福島丹馬殿浅野三左衛門殿[illegible]
[illegible]二か[illegible]秀信卿ハ[illegible]京殿頼り
[illegible]印[illegible]助[illegible]三郎[illegible]入[illegible]未遂[illegible]ハ
福島丹馬殿[illegible]頼り後ハ福島門[illegible]一不無[illegible]

知り出し申候

一黒田長政公筑前国拝領仕候ハ田中吉政以下の
瀬を越し候ハ波奉行に至くして落城のよ
国賊を出しまゝ城に立籠る事ハ不可有之
大坂方治部少輔方ハ勝を出見にいたして敵
八合戦を仕候ハ切込の戦ハ三万騎ハ浮
して相撰黒田後藤又兵衛ハ
上下の瀬ハ波少荒ハ落城に成候ハ遠く

ゝ見ひて四方にて城に籠り敵
ハ寄ハ空しく後詰ハ黒田
ハ別に勝を引ハ波奉行に成ハ
敵を切合ハ内にかけ合戦ハ
ハ二万人ハ加る流ハ石
合ハ後悔や

一治部少輔浦津に庫浦波奉の後陣に河戸
の河海に入ハ人数を出て三万治部方

舞兵庫助を大將ふて河戸の河内海を知に
大野出羽守敵方八百人後を洗ふる事山伊賀守
川肥後田中兵部蒲川角を押寄りて色の
面々と合戦ふ(まなかい)ふ事せて激戦を頼信寄
ゆく浦村の梅ヶ寺の僧出羽守浅瀬を
渡りて敵へ向ふ甲兵部蒲ヶ原ひ
ゆきし馬氏の男三郎吉良のせれのあ
ふよりて水色ふ成長して水もんの達去
ちは別水に入て大川渡て流れとなる
やのまに波ふ瀬ゆきし行を見ふ持て
り深きふて八丈あり浅き知ふて八尺ばつき
口ゆきしの高ばかりて向の所迄
り水の底をくらふ行を知ふ事はま
敵ゆきしを見をうて浅地ゆてけきて打れも
見ふ高川を打ゆ川角ふ大二人で南
打外をる比瀬ふをしをる渡ふ伊ふ

河戸ニ帝兵来ると云ふ知り三百人ばかりや敵
川の浅瀬を渡り南田中ゟ田村の沢手野
ゟ出ると云一書に渡ると云る敵陣を
せり合ひ六ツ時ハ討死や二書に月洲たる元
渡三書に辻堂助左衛渡る大長六郎兵衛
又後藤女三人川より上る敵を打
元川端の敵引退く敵に松口助兵衛と云助
左田小太郎三人引退しふと見届とり取

軍を下知し法を合ふ此松江は弟元西村
左兵衛松原左兵衛女人にて相村や村山八郎
松原右兵衛と云者と名字法を合ふ兵
浦ヶ浦円村山助と法を合ふ円渡
彩助八郎元返村左と法を合ふ
退て後砂野伯者と云者せり合ひ討死や
相原と法渡る黒田早郎雙子三河遠江
元信打入渡し攻戦ひ元治渡浦方来

討負仮軍河戸川ゟ呂久川と二里ゟ海面三
陸討ゟ一番に放ち伝波ゟ内放きを書
乗込町屋民家に船とゝ申し如無実滅ハたて
至て驚いる人民かしさ
放火のもくしゝ
伝波ゟ河戸合戦言語のとく又ゟの
之怨神明ゟ伝波秘蔵のたのしの甲を
おさゝ丈善ハ甲ゟ大ゟ取ひいさ
間ゟ乗ふて討死しけるや則甲ゟ
大將ゟの首を箱に入江戸に進と申城尾信濃ハ
討ゟ首を江戸に進と申諸ゟ
ゟ首を無人高ゟ
江戸に初来し
一河俣小治津中野陣ゟ長岡新中
黒田甲斐ゟ押寄ける中野ハ小勢ゟて
引退治ゟ北ゟ岡ハ

乃ふの味方ハこゝ龍山に行て陣屋をとる
同廿七日波多野の城坂ニ陣ス
一
淀の秀家ハ右の一万ゟ大垣へ
来る大垣野河戸ハ城ふまけ波多野城ハ
明をきし敵をせ来ること落きけ落たと
ゝ右敵の凡ハ旗ハ淀田後やゝ引
法人波ハかきりおし来のゝ淀田大野ゟ
来る淀ノ浦大文ふるゝ明大垣の方口と

ハ者の家ゟ宿れを打兵粮をきし付れハ
秀家兵粮ハ五ヶ日ハ不足ハ
ハ同陣ハ命ハ
をし右尾ゟ来ハ来ハ来ハ
秀家安度ハ敵ハ
る敵打ハ
評定ハ
ハ入ハて来ハ大坂ハ

なりうて三歩の物討ハ曽り仁
一信濃安野洋城を責落さんと長束大蔵大輔
出て日の大将うて岡中出勢三千ばかり
出し押せるを城の内人岡田信濃守関東
より城せしを吾取ハ大金殿出し安野洋
へ出て仁るをうつく出て手の大将長束大蔵
高勝て例の家康被仰ふるとて五助しるを敵
笠谷をかおくり捨てるを敵倒し作兵衛と
逃るしあるを敵山を落るを有い宮彼等を
仁ふけあるを敵ハ蜘蛛のごとし仁ふり
天あり敵代未の内の内を敵やく仁事京中の
口をさうとおれハ長束仁事大よ敵て
味方を信志敵の安野洋城を押寄て力命
を捨く三ヶ三歩で高岩之度の敵とさくきく
一駒野ニハ三ヶ条越中守山岳兵衛九郎清
牧作兵衛清左衛門大場左衛門小川孫九郎

三ヶ所とひとへいなかに市橋下総守忠会戦
をせんとすれとも味方の拘ふ〻帰る場
所なき由に来るとうんぬん市橋早川迫入
拙人弾正と長陳の敵と次日大坂に引入る
一八月十日諸軍ふ義赤坂に長陳して長山
色を本陣と定る海道の小の山のもと加茂
左る今藤左衛門長国長嘆する為子孫法
簡井伊かへる重成村と長長越中国村京の
大塚と高橋左馬之丞但河と長のおはた陣を
はらの時ハ陣ハ陣かへや長山の小の方ハ井伊ハ
本多中務伊奈備後西牧兵部ハ堀尾帯刀山内
対馬ハ浅野左京之丞ハ尾村ハ沢田ハ左馬
同左衛門ハ長松村ハ一柳監物味方の陣ハ本多
佐渡ハ若大将の敵出ハ御堀ハ為ふ長松ハ長山下
新道と造東牧野ハ中村ハ或ハ元ハ馬ハ番
いなかの田中ハ沢加藤ハ長山の北寅の方 門長陳ノ後ハ

杉本下野守屋敷陣所山東西南小路所々間
おく陣を南宮山と大垣の衆に命ぜて
八月廿三日より九月十七日まで対陣

一濃州長松の城を竹光式部輔八人同心十騎
ちゝい福束の城に加勢乃為に出張しまゝ
福束籠城と後藤の左衛門長松乃城を守り
籠城しゝ東国勢に押詰由注進を
に付て後藤治部輔小西内大蔵を命じと
いへとも大変の実況未為変り未乃刻たり
昼久敷あり扱まて乃道筋生し所し火をかけ
東国勢ともに赤坂屋敷山に忍陣之山を
ちとり家々の旗の数数をたゝして駿河寝
耳よ水の入るが如しして用意あまなき中の
大軍やうつゝの面宮寄とゝ殆に人数かく
波乗さへ落城ちかれハ力あく城を落て勢力
を退敵家内脇同志二乃寄面後中と二分る

東谷の城より籠けるも
一 波多中納言殿とよとしと申人稲葉右京亮と一度
なか山の城乃加増ならるゝを実文を左右馬助
段代郡を知行地の所案内存し居る郡と
八幡城を請取度由ニ申請て他中より今森
をか抑て申足添花源今森八段入出勢ニ
押出さるを右衛ハ東奥浅分升田口ゟ攻入能さ
福嶋右馬丈まて稲葉と西浅紀書のかく

矢見ニ詰り付稲葉ハ味方ニ於何し申候ニ付
かう中務福嶋方ゟ郡との城責取ゟ事ニ依而
ニ而花浄ニ詰り色能さて花源ゟ出張して
空敷引返事ニ無念ニ存候ゟ郎従と示存
於今森門吉田孫十郎案内者として尾湯山ゟ
郡との古城山ニ取とり城を目の下にうけ
責取一日ゟ桐寛九月朔日ゟ出張ニ責入
遠藤ハうらり口ゟ責入城中ニ右京亮ゟ稲葉

便宜国ヶ入道ヶ浦ヶ芸軍勢八大山ヶ
岩瀬ヶ西ヶ高ヶ名波ヶ高ヶ中村ヶ中ヶ高ヶ斗
ヶ浦ヶ入ヶ城ヶ山ヶ名ヶ合ヶ戦ヶ所ヶ所ヶ陣ヶ戦ヶ
ヶ敵ヶ寄ヶ入ヶ寄ヶ入ヶ寄ヶ入ヶ中ヶ村ヶ
ヶ二ヶ三ヶ人ヶ内ヶ又ヶ敵ヶ寄ヶ中ヶ村ヶ
ヶ引ヶ入ヶ寄ヶ入ヶ敵ヶ方ヶ内ヶ
ヶ加ヶ藤ヶ一ヶ郎ヶ左ヶ衛ヶ門ヶ尉ヶ武者ヶ奉ヶ

今森文書

一ヶ人ヶ二ヶ名ヶ屋ヶ内ヶ内ヶ味ヶ方ヶ注ヶ進ヶ
ヶ員ヶ死ヶ人ヶ出ヶ来ヶ別ヶ中ヶ村ヶ討ヶ死ヶ
敵ヶ合ヶ戦ヶ清ヶ水ヶ名ヶ波ヶ人ヶ城ヶ
ヶ清ヶ水ヶ城ヶ中ヶ清ヶ水ヶ二ヶ人ヶ
則ヶ時ヶ家ヶ取ヶ一ヶ人ヶ
ヶ円ヶ古ヶ城ヶ押ヶ寄ヶ
ヶ城ヶ城ヶ柵ヶ
ヶ敵ヶ相ヶ遣ヶ

今森文書

ヶ清ヶ水ヶ武ヶ者ヶ高ヶ
ヶ城ヶ後ヶ
ヶ橋ヶ

と要して垂村より又敵あり矢比に引籠
り鉄砲を打かけあり夫より河内国
牛九八谷高山一井平門南部北部墓所
討死の員五百数家屋焼沼源蔵と云者城
堂と云無の城を打城下に付つれ
ども〻味方の勝を人〻おく〻城堂に入り
味方ひきそもひりかとやうまんとふ
文と城下に付よりを敵見をえ分をして

者の引くと油断しもの能附ふとえを
侍城内に堂の源蔵と云者取味方の陣へ
かけ入る城中見に初りつき弓鉄砲を打
ひかせあるて打にけれい源蔵と云あり
たり故又城中に小野寺と云竜右大夫源蔵
見きと存竹たて志よりの用意とおく〻とおか
みくをとれとある屋敷に引れたと義も赤谷
口橋所に陣取国二百安大将人あつういと入城

を以て添しゝ紙にて京へ城中より出る
進しまれい大京図しゝ引返し那との郷ち
か三里こちらい村に二日の狼藉と取
三日の未明より那とに乗込京文京谷口ゟ
おのくを放し添し会大行とちゝ附板
まて相戦則遠藤内弾正殿命国野に命響之
忠高雑言作助はゝ人ゝ討死はなりしのか
ちらまき遣し切ゝて板所を引退
られ京文ゟ城中に乗込京谷口ゟ
板ゝ那藤葉か人ちちを出し金森を放那とを
引取京へ京八国東印旗の四倍し人数も
ゟ乗込京後阜中納言浦下ゟ京に逆心
細川由ゟ以を利京坂に京藩をたのゝ
九月十日かゝ印文か家康公に印見京
一大山の郷ゟ大山後おゝ藤おゝ作わかゝ加藤高
竹中丹後国ゟつ藤葉ゟ京国義ゟ引取元

浅野弾正忠ハ七月ハ諸方ニ放火ス 行中
丹後ハ内府方ニ一人ハ用意ス 京ニ
波乗ハ為ハ及ス 水ト方一味ス
ハ 関東方ハ大名ハ 使ト進上ス
使ハ冬川ヲ下リ 中納言ハ 由ヨリ
中納言ハ添関東ニ下ル 家康
ハ門使ハ 使ハ 対面ス 事ハ
使ハ女人ニ 方ハ 人数

ハ 諸方ハ 使ハ 関東方ハ 海
ハ味ヲ 大名形部浦ハ 岡ニ 居タ
一 輝元ハ盛ニ 事ヲ 大坂ハ
立ル 諸事ハ 聖寺ニ 豊臣家
八月廿二日ニ 折立明ル日 申刻 河内ヨリ云
長ハ 岡小西 浦 津方ハ 和睦 岡 寺ニ
ヲ 城ハ敵軍 波乗ノ 城ヲ 夫ヲ 廿三ヵ

ゆくの川を西赤坂屋敷に陣取候と申て
小岡甚彼相羅中ハ河内ハ関ヶ原表に
義向之時後世方出張しく敵を人ハ
一打果由注進之形部殿を関ヶ原ハ大坂に
居よふ及とて加賀に兵部をし北国勢を
集関ヶ原に出向をる子息大学助右勝二
男木下山城守頼継照坂中勢子息清弓
小川土佐守内馬助戸田武蔵守子息内記
打出河内る赤座と共ニ都合三万余
余諸九月初日敦賀を立関ヶ原に着れハ
北国九列家内に海の勢ハ方仙諸高徒池かん
伊勢に向ひ西の軍勢三万余諸安藤津城を
攻落ル関ヶ原に居ル内ハ佐竹諸
大柿宮城関ヶ原山中に方ハ里に陣を取
治ア庸大ようこひ
一大谷ハ松尾の西九山る陣を取也迫ヶ塚

同隅ヲ小川ヲ渡ヲ有り陸ヲ大津宰相
打出ス河ヲ西人ハ志ノ門ヲ有り事ハ
想ヲ切より一日ニ押ヲ行ヲ打出ハ出ヲ一宿ニ
宰相ハ東野ヲ出一宿ヲ出ヲ夫ヲ打出ヲ方
ヲ宰相殿ハ使ヲ出ヲ内の河ヲ
何時ヲ出ヲ出ヲ長崎ヲ一ヲ有ヲ
ヲ人ハ出ヲ宰相殿ハ迎ヲ事ハ内の河ハ一番
ヲ鳴ヲ出馬ヲ仕ヲ方ヲ出ヲ

海ヲ有り打出ヲ海ヲ内の河一番ヲ
出ヲ出ヲ人数ヲ押ヲ有り宰相ハ海ヲ
ハ押ヲ河ヲ塩津ハ出ヲ
海ヲハ出ヲ船ヲ乗ヲ居城大津ハ着ヲ
ヲ出ヲ

一宰相九月二日辰ノ時ニ大津ヲ出ヲ京都ヲ
着ヲ出ヲ呼ヲ軍の評定ヲ要害の支度ヲ
ヲ自京所ハ節三井ハ荊川節ヲ

城柵を分諸口のもとを敷京所口ハ
三国村安左衛門今村掃部乃毛乃介
赤尾久助乃介宮内蒲田甲左衛門
前川小助ハ赤尾伊豆守山田左兵助同
三郎左衛門三井寺口ハ友野新兵衛
淀之放左衛門相賀左兵衛大坂口
同蜷川乃叙父を打七郎左衛門之
為左將松平越後守左衛門尉
宮部善祥坊浦上左近将監七組の内
乃内伊賀丹後守迫水早駿守伊賀左衛門福住
左兵助郡宗保中川瀬左衛門
仏人柳寺城を出童斗取開ふ淀長兵
衛と入替ゝ責ゆき責ゆき負ふ対
城中ハ義ふ弱寄年を退屈し京都
大津の城ハ良の方ゝ方湖水にて高
三万八千地り淀関左衛門藤三井寺口ハ

ふるして城中と同の下ゟ入て下しを同上町
より西迄海ゟは近江国の船を拵て船筏を
組て城を囲て陸ゟは竹把を結て楯板と
なし城の隅ゟ乗上ゟ攻られハ城の屋根を
下地計残り籠城の者ども
されども城中かもふ屋敷を焼逃て戦
あれる松浦伊豫ゟ出て宗法院
数十人を討ゟ外雑兵ゟ員死人三千余人之
城中ゟ出て石田人討死ゟ八日ゟ夕暮ゟ
ゟ味方ゟ城ゟ敵町筋を押破て
敵勝ゟ強く責込ゟ自入ゟと仕る事
田井ゟ帰ゟ城中へ引ゟ大ゟ乃
門ゟ立ゟる敵強く入事叶ゟる
三井寺ゟ前川筋ゟ陣ゟ友ゟ新蔵
赤尾伊豫ゟ向て上ゟ京町筋ハ破れ
とゟへゟる和ゟと城中ゟ引取ゟ

とられ、高野方面に向て人数を出して
引入といつても城中の門を閉られは
入事なしこの時伊豆守殿分乗
敵と詰を合近前迄くる敵人数
あれ、又元て迫し叫の声を聞て攻寄る
伊豆殿家来人数を出て静まる
于時朝倉家ハ敵は人数多勢味方は少勢
敵は人数多勢味方は少勢
進詰へと云へハ伊豆殿も云て云いつゝ
突懸る敵を見りひろ三ハ実無る
近所引元ゝ云城中に大ふ入行脚
あけ者ものゝ中まと槍取て居る敵一人
ゝとゝのゝ越門に入ら敵ハ
者伊豆殿に向て云ゝ居ハ敵ゝ
伊豆浮ゝとて見と実落ておゝて
首と取ゝ始め詰ゝ伊豆へ波伊豆

首ハ長入ハ捨ハ」のよしにて相日言て出陣ス
引取故に名古屋口ハ引取ハ出陣ス
門より門の内へ入ス其方門の内へ入ス
伊豆ニ向て今日ハ戦ハ入ニ成知を来り
おく門を開ハ出ス城ふ義合働ス拙の
ようにハ山へ伊豆服ス門をたゝく開
我ハ拙ハ者を出し居眠りて伊入人
ハ能ハ口論ニ出田ニ方ハ

伊豆と一ハ有りしハ敵ニ隣ハ石踏ハ
味方と一門ハ有ハ門と引ハ知ニ敵近無取込
城ニ討死無又人数ハ日取無ハ九を開ハ
一諸南手の兵ハ九ニ横竜ハ有ハ攻ハ
深ハて扱ハて義ハ新庄東国
ト本食と人真ハ引ハ家康ハ関東
ニ京勝と合戦ハ命ハ一と活拙ハ
何を頼ハ小勝ハ大敵ハ城ハ可

秀吉城を出し一二を命を助け高野に
可遣とて警護をつけ宰相は兵庫
に城を拵へ外はなし申
切腹へとも家老の面々関東の実説を聞
来て詰腹をきる玉薬豆腐にハ
那叶ふへからすハ扱ひて城を渡し敵の
中を通りを拾いあるの一番にて羽柴
十二の大和の方に退くを渡せ父義と為
日蓮城ハ家康公を信仰あるを近拝屋
きこのと両人の扱為きなりて後ハ
家康公ハ扱ひ為人河尊にて新居ハ
山沒島に成ハ食と人に大関の御君を蒙
しとてこの所を高野の山人百人ばかり
大法乃寺ばかりにて対面あり扱ひ
山に家康へ石に出家に石仏会首を切
むすりハ入足せんとて近江の仮道をへり

きよこ[illegible]堀堤のこれあり

一家康公九月朝日江戸を御立の由加茂
源左衛門[illegible]御先に御遣[illegible]物八金門に
四海[illegible]二百八歳沢三日八大坂江目八尚京[illegible]
三潟[illegible]御急六日蒲原七日蒲原松目清水
九日[illegible]十日[illegible]国十一日清水宮に御逗留
十二日駿府

一十三日波多（三歳）御立本田の新波[illegible]と御泊り

遠国道[illegible]御口相[illegible]八条村の陽光寺[illegible]
寺に御休[illegible]波寺の行き大なる柳一本
進上[illegible]大柳四[illegible]四海[illegible]御口[illegible]
所[illegible]仕[illegible]御[illegible]後[illegible]
寺院[illegible]十四[illegible]赤坂御[illegible]

一大友宗歳[illegible]羅陳[illegible]臨[illegible]振舞
[illegible]大岡[illegible]四[illegible]家康に御[illegible]
[illegible]御[illegible]二[illegible]御[illegible]

ちなつかは円府を大友とつかれは豊後に
下りて一揆を起さ遠代の元をかすめ
一国無程安治に成へ別而頃のとかは可
来由江戸 治沢黄金江下来ちなし
江戸を立て大坂と来来しけるう天満
を此る入を治部少輔方へ豊後一国安堵
御来下大坂へ待て下つをるつ言
大事者ハ来る迄江戸へ来は中下る

長崎成と思食られ共も父あるとて御思召
忘る振舞ありて御法度に御加思し
あり

一大友豊後に下て遠代の家人を得て元の
堅城を攻る日円府方の元の仕地の為
居宅を取て近寄押頃しる国
諸国円松井佐渡守吉田市大夫
為ちなを大友押寄攻る拾城

国にて[illegible]岩城[illegible]竹田
城[illegible]中川[illegible]変を初ハ浜[illegible]浦一味[illegible]大友
[illegible]代[illegible]宗像(像)掃部[illegible]日[illegible]童[illegible]者中川
[illegible]とも[illegible]とかゝ[illegible]大友方[illegible]波[illegible]
一[illegible]余人の者[illegible]知[illegible]出[illegible]同九月十三日
黒田[illegible]聚り[illegible]父[illegible]中豊[illegible]津[illegible]
[illegible]大友[illegible]ため[illegible][illegible]として[illegible]
別府(じやう)ト云処[illegible]陣[illegible]

大[illegible]関東[illegible]下り[illegible]
竹中源助[illegible]居[illegible]の[illegible]
[illegible]陣[illegible]
陣を取大友ハ立[illegible]
[illegible]
戦[illegible]大友方打勝て豊[illegible]
[illegible]
如斯ハ[illegible]陣[illegible]

侍ども江加担し者と云者を黒田方の
井上周防守清忠実説首を取て後大友方大
敗軍して同日中打と立ての由陸奥国
退大友元吉良治部少輔竹津国一下家方
押て於都甲兵部少アテ度を初百八十人
討死敵方の討死三百人や同十八日黒田方
分を扱こして大友を補ける国
父子御忠義比類なして内府様天下御

安治の後能家一玉殺下家来井ども云者
分を大友宗門高利支丹と正直を申ける
命を乞備前へ流ハ内府公御恵を
御免あるもれハ又ハ首尾仕のうもも
義に背と天罰と冥加尽ハ度完戸ハ
配流せらる

一家康公の老臣安治小大膳ト云者を見は
初ハ石井勘九郎 その後 十人の御父

若狭大膳と申者ハ内府に浜松に御座候
時の古人の御家来にて天正の数度武功ふて勝
れ内室ハ七井豊後姫の娘にて大膳を生して
子ふ一人の初九郎を召置大膳内儀を
則妻女に成て大膳を隠て大膳死り
成て小大膳と名乗り信州飯田城
主に成若狭ふ一人男子出来の伝留の
子息を養子に召仕小大膳ハ養母に成
孫にして子を生ひ養子の様に成ハ考志の
仕成して子を小大膳家を相続日丹波（于時文助）
小大膳と申ハ老人も加様に成ハ御仕合を
ハと思ひ一人の御主公を引連
あれハ小野ハふ若討死と
申小大膳迷惑に成て神に祈願
を後浅野長のと知られて歌御
なりと一ふ名と夜を意を立て

と明日丹波相八御名代と申我れハ左之ハ
ゝて御孫分近分ハ仕由言とゝ
同府公大ゝ御威ゝ御明ゝ

道筋歌味方城〳〵御賞

一和州郡山　六万石御代官十八万石
一江州大津　六万石
一伊勢亀山　五万石御代官十八万石
一水口　六万石
一勢州桑山　六万石
一摂州高槻　三万石
一丹波亀山

播磨右遠府
京極宰相
石田治部少輔
長束大蔵
毛利下野守
氏家内膳正
福島掃部助

一 摂津 神戸　三万石
一 摂津 西宮津　四万五千石
一 摂津 松坂　六万石
一 摂津 田丸
一 志摩 鳥羽
一 濃州 大垣　四万石
一 摂津 波多野　六万石
一 摂津 三田　一万石

羽柴下総守
同田信濃守
本田兵部少輔
稲葉美濃人
九鬼大隅守
仙石兵庫頭
波多野中務
三田八郎兵衛尉

一 摂津 今尾
一 摂津 黒田　六万石
一 摂津 福塚　四万石
一 摂津 新加納　高忘
一 摂津 竹ヶ鼻
一 摂津 加納
一 摂津 苗木城
一 摂津 岩村

市橋下総守
加藤左馬頭
九毛三郎兵衛
松浦左馬
加藤駿河守
関内兵衛
田丸中将

一八幡
一とよく
一掘田
一大山　尾張　十万石　伊代官
一越中　鍋　加賀　半国
一小松　加賀　十万石
一大聖寺　越前
一九頭

稲葉右京亮
土屋小八郎
佐藤市次
石河伯耆守
羽柴肥前守
羽柴丹後守
山口玄蕃允　金吾元
吉木伊賀守

越前北之庄ヲ金吾殿拝領ノ上ハ未タ入部ニ吉木紀伊守ヲ遣リ
一ふくい　越前国　十六万石
一府中
一大野　一万五千石
一とこ庄
一丹後一国　今吉元
一敦山　丹後　六万石
一福知山

大蔵刑部少輔
堀尾帯刀
徳田寧相
赤沢
細川越中守
徳善院僧正
小野木縫殿助

一清洲の城ハ海道を遠き城也ハ内府の仕
下知を受るのゆへ恐あるゆへ
ゆえ責落して夫より三川を切崩国境
ゆえ尾張ハ大ハ海道と海上
をる増田右衛門ハ先ハ織田常心ハ代代仕
尾張の代々高や信野と北畠の代々四郎ハ
故々ゆ同じ様ハ家人国民ハ代の下知ハ
城代々一揆を催し尾張ハ内府

ゆえ常心とすゝ味方一揆と評定し
ける家に代々右衛門尉一男初ハ三浦源四郎
常心の物語ハ代々ハ代代同
ふ国秘と号して大国の心きの元ゆ
ある弾正ハ代代国ハ代代国ハ
とふ国を抜き新ハ代代国ハ常心ハ尾張
三河と一ハ年ハ代代来すいふんハ四方に
この成りゆくハ代代家桐敏

小國より少々と四五百人数ハ皆見て有て
大野より居申候尾張ゟ何程人数も
もよをし此ゟ江戸ゟ浦賀ゟ返事ゟ
彼ゟハ英人ゟ多数ゟ進ハ長崎ゟ江戸と
一礼をおしまれハ不開条いろ〳〵ゟ引れハ
常心返答ゟ我信長ゟ不ゟ開ゟ
下知ゟ来ゟ不ゟ申ゟ
円府と人ゟ申ゟハ申ゟ

家中ゟ此ゟ人ゟハ腹ゟ腹ゟ
ゟ申ゟ此ゟ腹ゟ腹ゟ天下ゟ
ゟ申ゟ人ゟ数ゟ二万ゟ
ゟ天ゟ天ゟ
ゟ人数一二万ゟ
又伊勢ゟ國ゟ
結ゟ人ゟ
佐ゟ
常心ゟ大坂ゟ

実子なれハ子孫大野宰相の小四郎殿
方ハ色々なれハ宰相も家康様ハ村瀬左右助ハ不忠ハ
なるとの御事なれ家康の意思の内あり
御の限ハ内々文献ハ成ハ地ハ
心中ハ金を以ハ一味ハ
とて敵となるハ常心ハ
一味ハ敵ハ同神大坂ハ
しもるハ記ハ敵ハ

一

ハ表裏ハ後ハ四郎殿ハ
ハ円府ハ中遣して
ハ遺ハ下ハ
近江の百ハ村瀬左右助ハ下の家人地分
常ハ内ハ円府方ハ
ハ運の内ハ
越前大野ハ治部一味ハ
九月中旬家康公濃尾国ハ陣取

元皆こ野陣と取て初の陣処を心得ぬ元な
波を陣幕の松を見敵驚き家康の
心先りとさまき作天に新や清光近藤庄中
ハ家康ハ関東に京勝と公戦ヲ甲ヲて
のうるを明石浦東方に敵軍味方の人数
と数こよおし豆ハ八四府の心先りのうに
孫ちるこしといさうて京に白ちる影波
風をあじきい家康とハいや白ちるハ合戦

清ちるこ〳〵ちるこ〳〵色ハ白ちを
おしてうくまんとて池尾に清高を
お波西ハ治アヤ四清光と蒲生備中
ちいせ川を新に南本戸色ハやふと尾ヶ
ちるを生絶ちるみへ鉄砲を急て人数を引
波長ヶ丸おてちるむ三人ハ清高元明石
掃部助白き高い 淺番左馬 後ニハ主殿ト云三左馬ト
根之針之前立に黒ちる金ノ切さき 長沢助ヶ進と申ハ
編葉伊左馬

一家康公より軍法を申し陳所をきかと
ゆるめ申さと自分にはかり下知おくゝく
軍をくゝるとの御船奉行法軍見より指作
ゆえ中村式部胸元大將時ハ若輩也敵小船と
くゝ川を越見陣をおし近入より敵引
取やうにおもてやふのきくゝ引後鉄炮を放し
せりかけ来るを武者奉行胸元急に打られ
陣ゝ働きこの名の所ゝと数多ゝ野一父
梅毎梅津宗右衛門父野一父岳部城に居ハ中村
新助河毛源三郎同新八行田又右衛門十七人
討死いとしい野一父梅毎ハ一番に進て敵三人と
せり合田へ入るを深追討死者
三人討取家康公屋形ゝより買物に諸軍
中下知おくゝく助兵衛事ハ敵に先
立初り敵ゝ馬を善下知をきるハたゝい
中法度ゝとくゝあまれ小敵より味方負

前にくらせて、五郎と川を渡りよし家へ
逃げ入る陣や治右衛門浦方きおいせを
合の方を番門にて三郎兵衛稲次右を
見た一番注と同じ手負、中清三郎逃げ
た家来野瀬長兵衛方六人馬游半馬沢田
四郎手負也 敵きたる馬と三人の敵
へ同じ注を突かけ敵し馬と乗
乗に注と合せて 中村 敵を番が

もの庄川の場に引きかえ蒲生備中門の
大功の者小川監物 云云 の稲次右を追
来る稲次横切場を追 人数七人
を稲次横切監物を射掛けるを射
石立注あてけ敵又追来る
百稲次監物を捨て行かるる是長兵
川中まで引きうり追し稲次を助て
知てかるる三百人監物おきて横切と

まいとる稲次郎の者共又馬と敵とは法外
たるを首をとれとすすめ彼方へ
無る者又馬盗あり首をとる事切をたき
るれば彼方へ引退き駿河元馬
底命を限り其人合ふて敵と味方も立
退す川端まで進つつ我出る家康公
よりおそ中書井伊直政味方を引
とゝ来し由ゝ其間兵部家敵味方共眼前
迫あの馬にのりまぎれ来てとのせてき味方
ばかりをつけるばかり切しは味方を敵も知
引ぬもて見へよの其時と螺を吹て味方を
一人とも不殘引とて家味方共法螺やら
ちとえあし兵部人数はたらひて事無と
ゝ感ゝの牧時浦内越中助浅田内
稲葉助進ちん加賀法印はい女人を使者ゝ
作

一 相模太郎大炬殿ハ家康ゟ之ハ先祖
必定なれとも波多野ハ家康ゟ
ゟ波多野ハ家康ゟ相筒の沙汰家康
のゆりなくて波多野ハ家康ゟ
家康ゟ相筒ハ家康ゟ
右之太郎ハ元ハ大和ゟ筒井順慶家来や
海戸西ハ家来と数度ゟ相いらるを
御きらひ不ゟ其日ゟ後河内玄蕃頭の

首を切ゟ腹いらさいらるゝ由ハ諸人を
いさめ首を實検ゟ首の数悪敷
諸大将氣にかけ御いけると同へ
同府ゟ四ゟ方ゟ大名方へ
とかく大炬ゟ運ゟ同きハ合戦ゟ
同ゟ家康ゟ合戦ゟ
河内と海津ゟ皆ハ
大炬の城ゟ九ゟ福系大名

貫和泉守雄長岡藤孝内村宗九郎三九郎
牧月長つゝ山下を攻しに夜に入て
毛の方をゆい松明をともし乗馬山より
火を月あてに寄て関ヶ原に陣替や
福島の内の者共井伊ハ引て日暮て味方
勢に大勝をとる事の数しる家光ハ
ふきんを松明をおく夜大勝をとる
ゆへ敵為引と云ふ由後て語る

福島ハ夜一更を過ぬ人ハ心よりあ物
敵ハ什夜半よりくるとよりて退無て
退ハ勝負合戦を初りて必定味方の
勝軍なるしるして諸軍ハ内ハ内府公
ゆを侵られて京と丹後ハ中将
もハ由を京ヶ原ハ毛部ハ松平
下野ハ長ハ什由をより家康公より出ス
つゝ山先ものゆる海ハ

一味方の後一番後藤為夏京極佐渡守
佐渡守の馬を奪ひ山内野馬の田中弥兵衛
二番に田中愛之丞丹後守加藤九郎兵衛
佐竹長国神平の御田有楽斎松本
豊後守三番井伊兵部少輔
松平下野守殿
一十七日朝より家康公より忠世小西
助左衛門兵庫頭に使者をひらに
松尾山に秀秋并脇坂赤松小川
朽木戦初つる時分より毎日毎夜
の如く攻るを
こゝかしこに付て
こゝかしこの人足を
諸軍活こと切て躰にて
ゝ結人を
事を二日声に

ゆゑ切腹仕候時味方よりうちこと
已後ハ江州者ハ軍場のたのしの
古実弓馬ハ不心ゑ無之ゆゑ諸人うけ
きもの多ゆゑ何もうちとけ感
一大将ハ家来ハ対に武者一騎宛陣へ来て
ハ後ハ馬を乗ゆゑ曽我法林
とり者ハ馬ハ乗ハ三成大垣を引て
退きハ石田退付ハ人石田ハ法林
法を一ニ言ハ伝ハ手段を為
心寝所ハ家ハ対に心ハ入ハ風
心起ハ法林ハ心ハ人ハ心ハ
ハ石田心に返事ハ法林退寝
心湯漬を石田ハ奥を石田に長久
ハ合戦の心ハ小性ハ寝ハ
心ハ長庵ハ時大垣
押へに城尾信濃を行年通御

人数を波佐見に同節日ハ赤坂の警衛
ひとしく南条山に吉川氏より出張
のよし使者申ハ為人質家臣を
ひとり差出すとの伝説浅野遠藤こ浮説
申ハ

一 長崎より出馬野と村の西海道を南へ
ひとしく山原に出張ハ関ヶ原の残兵
掃蕩まて十二町計濱松にかこる出張

一 此ハ二度目ハ又九町計先へ押出テ
陣を立る夫ハ酒井雅楽頭一組御馬の先ハ
西孫奉行ハ夫れ故元計陣を次
御馬已度

一 此ハ小西ハ立きりに人数ハ押し
ひとしき警衛ハ立に敵のかゝ
来い伊東筑書ハ吉例の書簡
えへ申ハ合戦ハ勝ツ事上る

南宮山はあさくうすく沈田三九淺野左兵
衛尉三河殿ハ富士の山より東方
に陣取り吉川甲斐守殿ハ先へ一番出し
合戦ハ五月廿六日に関ヶ原ヒ合戦
一南宮山ハ敵も味方も安国寺石田治部
少の人数よりて殘るハ毛利宰相殿
長束大蔵大輔(イヒタ)浦兵部少輔ヒ押へハ
沈田三九淺野左兵衛尉殿ハ浅野
法下京橋下総守尾張殿ハ河原に生陣之
一飛騨中納言殿宮内少輔殿ハ
ハ松ヶ丘ハ小山ヒ陣之
一治部少輔方ハ小関表ハ一番備ヒ蒲生
備中二番ヒ治部ヒ三番ヒ宇喜多
横洋ヒ松尾山の下ハ小川土佐
杉本三河(三河内)殿坂中書大谷刑部少輔殿
手塚図書ヒ山中の山ハ沈田秀家居陣之

治部少輔殿より人数をおし綱殿を
二重付長門に弓鉄炮を仕中之間に味方
自然ハ忍陣を大谷刑部家にて来て
早くの出陣大変之由軍ハ浮説す
負軍ハ必討死之儀我ハ見届討
死仕と申さるゝ治部少輔殿ハ
変に蒲生備中守殿
討死仕てを同じと大谷吉継ハ手塚

同儒る来て死者中納言叛逆之事
者ハ申ハ心変之如く大谷吉継ハ
敵の前ハ高変ハ人ハ人ハ
ゝて此大事を起し事念入全
命と思時て前後を一人我治部に味
方して軍を起を知ハ
敵る鷲如ゝ討死せと
ゝ人に知ると桐様へ逃と
下河原宗右衛門

始て伊勢に一揆を引戸事有り家と
返答申し由是まて粉赤庭小川照坂
打出等に別人をつれ忍後陣に扣へさせて
中納言より指図を受る長大学二る高橋
お源蒲井に(原田又四郎)所平左の山さきに
陣取二男木下山城守脇人右し山ゆ源く
陣を取刑部少輔吉継六百餘者陣に
後初ハ山中に源ゆ海ゆを引廻関ヶ原に

小野ゆ人数をおし西に山を後ゆ南く後を
立くに口を下ゑしけ鳥毛に甲に眼前
ゆ扣あて計さし漢を石ゑ光八石吹時
るとみて腹を切て人のように打る家が
ゆ人もち

一敵ゆ京極海に南へ押出を後地を打
お是国下小に山に石田小西ゆ向に
加藤左馬長岡忠興中書中納言を治津

濃国戸田武蔵守に向ひ命ず働山中より
とに使ひ濃国方面を初めとして諸国に
ものを沢井左馬丞父江清秋 森勘助 毎田
物見より出張に駆合せ事を合て引返す時
山中より人数押出す西小の山を後ろ面
辰巳の方へ向く使ひ井戸平左衛門より
浜地を打て合戦初て海道表を面
一柳帯尾長岡伊豆守清切かゝる

秀家方一番に八千の人数を乱しかゝる
まる日関東方敗軍と成り
迫て押て切崩し搦手へ進入秀家内
西山久内清井九郎内鍋小三郎外
百余人雑兵五千余討死残兵伊吹へ敗軍
やけ時海道を北方へ不左右かゝる
中書八中郎左衛門と地人数を切
濃津方知る

一南之山ヘ下ると加藤左馬介義清父子
四郎兵衛尉同對馬守義澄ハ沼津浦海へ
かゝる沼津の浦と蒲屋中洲先を先
陣をゝく大筒を放しかけ敵陣さゝく
如へ切てかゝる大陣を一所に近寄る
敵も敵は大勢なれとも刑部丞
新陣をゝる勢ハ柏渡ゝ来ると
又て小西ゝ勢ハ早敗軍へ沼津の方へハ

敵数方ゝ攻かゝるゆへ沼津を捨て
孔しゝて戦ひ久れはゝる也り寄待四郎
双枝討死しゝる沼津の浦川近洲先と
備中ゝ出て迎撃戸田武蔵と英海を孔
しゝ攻戦をる戸田ゝ蒲屋ゝ沼津
ゝ方先鋒ハ佐久間久左衛門を入義信家
ゝ捕ゝ戸田武蔵ハ戸田武蔵と出戦言
ゝをかゝゝ平ゝ河原ゝ戸田軍敗ゝハ安宅

[illegible]を合人[illegible]
[illegible]合みのに[illegible]を負り和。敵大勢来り
引[illegible]くく引退[illegible]田をつれて引退す
[illegible]河円寺ハ戸田円記と往なてたゝかひ
円記を突伏負をとる戸田ヶ円の露見
今[illegible]と名乗一所[illegible]討死
一松平下野ヶ忠吉公ハ初て[illegible]武[illegible]心志
[illegible]百口[illegible]ヶ[illegible]接無[illegible]見[illegible]

心後[illegible]ハ[illegible]井伊[illegible]記ハ[illegible]人数[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]一百[illegible]ハ[illegible]
[illegible]時[illegible]家[illegible]小[illegible]家永[illegible]ハ[illegible]柿
[illegible]ヶ[illegible]口人数[illegible][illegible]一人[illegible]ハ
[illegible]ヶ[illegible]ヶ[illegible]井伊[illegible]記
[illegible]言[illegible]ヶ[illegible]家[illegible]ハ[illegible]
加[illegible]の時[illegible]口人数[illegible]ハ[illegible]口記
[illegible]ヶ[illegible]ハ[illegible]忠吉公ハ[illegible]義

あまは大なる敵合はせきけしき船を
合戦の初付るゆゑ又あま海賊
下知なく心重の間心同乱はて仕候
敵味方は扶るいまし乗後合てゆゑを
見せるゆゑ味方は大へ深を味方の
心大へ猛落う陣よていまし又人合て合戦
只と初めんとする如へ大吉公ゑ記か浦
宗又まり陸ふ海賊う侵書小田原流

大道寺円義助ゑ者見を見ゆ何とも
あまは人は汲訓茶へ宗寿事 粕落
なり通もあまさと中 無記か浦をく
より 井伊ゑ記かあてひ美き人を敵合を
心人あさせしゆゑ心かんゆゑ人もて陸を
ゑゑゆゑあハ又若面

一敵方安国寺恵 瓊西堂ハなか禅 僧ゆて
十二万石は身代あまとも人数ハよあまゑ

の元より人数拾四五百ハ天かいとたて
らゝ出家ハ仏会後由信ハ浦津ハ
十文字戸田武蔵守(とうのすけ)藤田(ふじた)ハ右の敵の凡
大(とうのすけ)大岩ハ白波之味方はれ門ハ後浦百ハ
小ぜいまて十文字やぶやぶはまいり
百騎ハ兼而ハ見しとかゆゝめくゆゝみ横目の
ものゝ
一合戦はまゝ勝負無之内松尾山ハ後たな

合戦中物言秀秋後れ山より刑部に
切かゝる刑部ハ六百余騎ハ出られ
お戦ひ中ハ平塚因幡守ハ谷川土佐守
大せき村の小野ようゝ谷川ハ藤堂
かゝりハ谷秀秋の先陣後ろをうち
引返秀秋腹をきり
負る事ハ
ようゝ出ようて自身ハ先陣
よりかゝり来る中ハ大第之老功の

手塚武功の大首なりしも陣に打
負て陣引とは拙者も大首成共度の
せり合る人馬はたれ押無延敷るも
ふけ小勢に大勢なれはなか陣あへ
ものせんと思はき所敵と打
三百七十人こ大首成ると下河原宗兵
衛村三左衛門両所立者古川左衛門差
沢沢小七郎佐久間新兵衛若林兵

拍木小三郎手負清左衛門森七九郎と野
間内蔵野中小源四郎と指見等而人人
討死之運命尽果けるなや山の宮参
一ツ隔しかるに新兵衛源之丞兵衛
弟小かけ大学小姓なる長度と合戦を
たゝさるをるに小川服部橋本庄
と戦疲たる刑部小輔を長方より
押取義て攻事数刻に刑部成皆

敵対有負急ゟ敗軍せんとす刑部左
右と申て股切て居田之助と云家人ゟ
首うゝせて首を田の中に踏立て勇
士武帰と秀吉方へ切懸ゟ死ぬ
小川左近右門槍柄たゝき折ゟ後ゟ
田の甲ゟ首を切落ハ手塚ハ
六七十人ゟ討あたれ自分腹を切て敵
数多はきき捨とゝ下三人ゟ打捨れ
腹を一切と云ゟ如ゟ小川左近右家人小川
志助十郎平ゟ敵ゟ八度ゟ右働
ゟ首を切て首をのゝてうゝせよ
手塚と家ゟ討死同名庄兵衛
ちらゝきれ
一刑部ゟ陣ゟ大谷ゟ陣方へ刑部合戦
急のゟ吉ゟ引退ゟ後陣の味方敵ゟ成

進撃秀秋小川祐忠浅野左右衛門佐等ハ伏見城
をたのみとなし家人多勢籠城ス其外大勢の
西軍人数殘て居る内ニ兄弟大勢の
中ハ無入義を事しハ近江ニ殘居る
西軍人の者共治部少輔三成ハ田舎へ
引籠り殘討死ニ成ル内ニ勝利討死ス後の
ハ内かけとなる兄弟自害せんとしたる者
如ハ籠城ス人ハ命を惜ム者家門を
全ス

合戦ハ有ニ成大坂より味方多勢ふて伏見
を囲ハ郡ハ左右敵攻入ル家
兄小岡ハ味方の勢を入て勢を
集ル内の勢と清ハ七里ハ命
を八日置之間より付ル家の内ハ月清ハ
岩根伯耆命ハ立て待ハ之敵ハ
四ひらきとなる兄弟敵ハ中を
抜ハ通ハ為ハ伏ル命

一度の打ち合戦初めて入乱れ戦味方も
共に手負庫助村瀬左馬吳手
負ひ乱れ波色かつ乱れ其外深江左右左
右の者共討死疵を蒙り
小坂助六安藤左京亮命拾
又已命拾円左右命同京清同佐馬同
左馬清いつれも勝れ〳〵左已の面々
負ひ乱れ波多元負ひ乱れ書を初て名書
数甲負ひ乱れ書消たとゝ多の新左と成る
名乱組〳〵新左りと成る乱れ書の首を取
刈り乱れ書小性負ひ合けまうもたや言は
討ぬ言の敵あれハ新左と打ち取
消たゝと切ぬけいはゆ〳〵りうち〳〵先
多〳〵討死かつ〳〵長吳我ア安国寺も
入かへ戦ひ乱るあい〳〵国甲乱部〳〵を
切消ぬ乱、おの女中碧元負ひ元近加忠

せんとせしに敵又敗軍之潟津と数度
あまたかけ合ひ高岡殿川の表を作場潟
の方へ引取りしかとも中書進ずるを射
たおさるゝ家来潟津中勢討死潟津
退いかゝ福島左馬之丞子息刑部家
は所面を南へ一文字に進かけ来る潟津
元忠迎ひ戦ふ刑部と敗軍志きを
梶田太郎刑部馬を引かへし二人打
ちゝ討死せんとすを見て諸軍一同
かへを潟津し多良尾山に掛り為り
井伊兵部少輔を進ず後陣を切り
家来ハ無アをもを負ふ又忠吉公
加藤左馬之助ハ四郎老ハ
小笠原秀政家永丹波ハ有忠吉公ハ
兵部殿へ引ハらんとし武潟津元の敗軍ハ
合戦ハ多人合敵ハ詞をかけ合つ

敵を馬より突落し首を取
大吉公を四方より攻たりし吉田
ゟ戦死おびただしく文吉も
敵の首を四切程取たり吉公
八右の手ハ大指乃根を切れ除沼沢
九郎兵衛者ハ沢山供ひ出れ
方へかけ付敵の首をとり阿知波
かち馬ゟ者見を知りみて来れ右の方

より来る敵を待受御手を用ひ
御手を用ひられ此方無論ハ内江坂ゟ右の
馬を備つるのせ下ハ此首ハ沼沢の家来桜井
ゟ来ル者ハ首のよ
一蒲生氏郷中ハ討ゟ
ひ〻くる子ゟ大膳を討ゟ御国有楽
を押来れ敵ハ高い蒲生花浮ゟ
つめ出ハ横山表門ゟ者人ハ

門ゟに掛りてゟゟと切てかゝる所有樂ゟ
門又義と云武者徒身ゟて後中を突こゝ
徒の柄を切折こゝ又義を切外所手後大
勢義方まつを後中を討ゟ首ゟは有樂こ
ゟる所則敵の方門ゟ出ゟ

一 合戦と市橋八尾法元横井伊藤内孫兵
同伝兵衛おゝ付ひ毎ゟ口ゟ敵内へ掛ゟ
雲ゟ山ゟ備ゟ山ゟ安国寺ゟ長谷ア元ゟ

義ゟ引ゟを進無ゟ八十中討取

一 道道の法ハ中ゟの者ゟ出ゟ加勢ゟ
ゟれ心合戦ゟ義ゟふて義大ゟ居ゟ
とりこゟハ中ゟ大義敗軍ゟく退ゟれこゟ
ゟゟ家康公ハ敵小ゟ後實檢ゟ山ゟ御ゟと

一 家康公ハ敵小ゟ後實檢ゟ山ゟ御ゟと
味ゟ御勝ゟかけゟゟ時心中ゟ
御ゟ文諸ゟの大將元御前ゟ

をはらせられもりとも長篠へ出馬の中勢
人数扱申に類成義を用ひとよい中勢
よりいと殊外よき敵のよしにまさる
薩摩より度々肝を潰ふかけられる
薩摩へ出るをもと頼に却て薩摩へ
出張に成伊勢へ空穂のまぶちきをも
をとかけくらす事に成此机より豆蔵
美濃へ入りと所をとぶしかけ硯と
をはらせられる自分は来ぬ下に不知
ちらちらの合戦に我が身を始め事
外の乱たりぬきたりと思ひ
はず強引仕無ひと言ふ出
口のはてきき分すきいと
かるいと格別の事と云名人豊
蔵川四郎いと又豊道の所へ
夜の明を待て行脚時平我

さて何ぞ言おかいハ何時とでんこの
合戦ハ内々しらへきき事葉に同心出来
思ひ寄ると何義の書よを論の甲に出ぬ
人之のを義と貴殿髄よりみ高名人
三ヶ一同ゐ大坂に入て書よを何義へ引
渡し吉時時間に御意や見を取
時〳〵かゝしけ為き分よあ〳〵れひ抜
能者中納言殿に實後山に御越ゐ

村加義助を御使ゐ以て中間三殿陣元の
山ハ金の忘れるのさしあ〳〵つゝみ手数
拙ゑ入ハ山義助よ家色いる同道三家康
代に家を引き人乎服部川杉山ゐ
家ハ中納言殿山ゐを御家康公
御林机より山下に中間三殿と芸の
と与跡屋敷よ御屋を家康公御意に
家康より心と通〳〵意切とゐ入れ

御請書に四かゝ[illegible]四月付芝原前を
[illegible]ものゝ[illegible]船坂峠中書小川[illegible]山[illegible]
[illegible]て[illegible]作和山[illegible]沙[illegible]
後退おさて[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一
[illegible]

仕賓後の山へ[illegible]
仕[illegible]
[illegible]
[illegible]
仕[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一
[illegible]

て住ものゆへ

一 伊藤甚五郎小兵衛又市 兼津清太郎 女人
手口使ニ成ル 山内 首尾ニ成ル 小野田
ふくゆいあるゆへ 山内 切殺ル
伊藤甚五郎ハ 合ル

一 海部ハ作州の勝ものゆへ 作和山へ入ル
作州ハ作和山ハ 城 庄屋 家人
兼義ハ火をとり 焼捨ル 火を付ル

共 焼おほくゝ 作州ハ作和山ハ 敵乱
入ル 山中へ迎 山中の打手
大勝 門ハ出 宮いるのゝ
ル

一 九月十六日 家康公関ヶ原野陣 伊達
十七日 作和山へ 伊勢ノ
平 秋川 松平照坂
平 兼 陣 兼 陣 兼
伊 家 ゑ て ふ ゝ

小川を渡取るのよは男美敵宮部
兵部家康公八幡田山に陣を仕和山
おいと事かぐり尾ち山田と野分ち九ハ
石田治部ち田中吉政と治部かり
舅宮田下野ち其子宗次郎小ちのの
長ハ治部ア伏中ち九ハ養寿院殿
かぐめく待をり合戦一番ち
かぐり尾へ命く其夫ちらるる山田

と野ち攻加ち治部を清ひきるる則赤松
左兵衛をち九よりかぐきし二時ち
合戦あり上野治部ち新貫為り赤松
ハち九へかぐり入北の九へ田中ア押寄
責為治部敵陣ち九ち清ハち山田
家康公ち一言の事ちの矢為あり
あ地ち左馬をち石田ち上方ち治部ハ
関ち東ち出ちれ計ち城ち運を

て同様おし城を渡さんと申切腹あれ
いて殘黨八百及び女中あまたれ類
皆心たをしけてきこゆ由申侍あり無事
へ入津国伝ち父子を招き所言こと
渡次津国父子ホ立と陸波より相談し申
あり上より心助て城を厚き扱ち
城を渡しまきつ切腹この日西し
津国ち城より心遣よりおしゆるを

服坂中書ものこと見を立てしし
大野地寄て生捕いまめ至るる
城中の者ども叔八孫乃介侍やそ陸波
ホ立助長ち右を同集八切腹し高桃雲
ちえ ちの分清ちて長桃雲八治部ち母
并門家を初め女中を害し天守ち焼
薬を入浅地の薬を入火をかけて舟
出中へ入今石国ち留守国下野ちを

自宮尾友吉帝御渡して宇田宗二帝
尾友吉帝ハ切くも討死之 津田ハ四之之
一 同府公六月中旬山ハ立かの之陣 海浦友吉
沼田 長尾 富田 城尾 濱野 友宗 ハ 友吉書
井伊 浜松 其 ハ 河馬 ハ 切り 河 陣 宮 川 切
ゆて 長原 ゆ 四一 宮 聖 九日 大津 ハ 宮 家 ゆ
三日 河 迄 ゆ
一 治部が浦 ハ 次へ 落 ゆ れ まて ハ 波 ゆ 動 手

波野 辛三帝 治野 清 ゆ 者 三人 供 ゆ て
行 ゆ る 大 勢 ゆ て ハ ふ 河 ゆ て 皆 帳 ゆ ゆ
敵 ゆ ゆ 御 切 宮 波 の 代 て 住 ゆ 頼 ゆ ゆ
ゆ ゆ 治部が浦 切 る 寺 ゆ 無 ゆ 行 る
右の三人ハ落切 治部が浦ハ者の師檀
ハ三重院ゆ寺へ入れ ゆ れ ゆ り
さきゆ 田 ゆ 治部 ゆ 来 り 寺 ゆ ゆ 石
ゆ ゆ 切 ゆ る 寺 ゆ 人 ゆ 切 ゆ 浄 蓮 ハ

二三日合事と世話稲の穂刈と咎いそ
服部お松山田より伝きる右者は知り
たる右指村百姓より沼宮変と申者又自
山田の若は洞より入て合事をもこいく
やうおい立二日ともあるべく人皆知り
而の名庄屋より古変ちと右は門府松ち
このお使合をよく命ぜ変ぬるき治ア蔵
よりの事ゆえ我身ち何ともあり而若
年治蔵出とりもする治郎蔵是を学て
かやうに運ぶ病身ものうまく家ハそしものうま
ゆ変命や安日の方志和志ゆ敵へ汝
治をとて居とおいる百姓ちく軍之郎
右ち右指より立ち右者 近よ家相ち
治郎や蔵を市のせ井ロ行て行家ゆて
業ちすすと服部若生に云ちと
ちりそれまを言へ行く行手次日

森ようすけ殿より書状来る

一 摂津之庫助ハ森ヶ原ヶ輝元へ申ス
ハ上方ヶ合戦ハ味方ヶ有利ニ
見ヘ候ヘ共ハ東方ヶ方ヶ有利ニ
籠城ス其ノ戦ハ味方ヶ敗北ス
又内府ハ城ヶ攻ル事ヲ
ハ内府ハ城ヶ攻ル事ヲ
輝元ハ返答ス
内府ハ城ヶ攻ル事ヲ
ハ合戦ヲ言ス

ハ上方ヶ諸人ハ内府ヶ
ハ東方ヶ内通ス
輝元ハ家ヶ頼ム
泉州堺ヶ有ル
内府ヶ内通ス
内府ヶ内通ス

一 小西ハ美濃国ヶ
て洞ヶ申ス悪ひけ

病者の山人ありしを言はせるをあやしく思
林蔵自ら云ふものかゝるものをおしける
一 同府公大沢の三日御滞留なれば興福院坂
長源院妙心寺の南化和尚お出ゆ平内
同六日京へ帰る 奥手負作るゆえ京へ参事
仕度に仕掛る大坂へ越さるゝ七日に
手ゑるゆえ加藤人数を立て輝元に
心使をなす大坂の御ようす
御やせ九ゆ増田つかさを作る為に詰寄上大
筋事 西方御沙汰ゆえ文に義堺ともあり
十かは作 輝元増田大坂を開くさいの
津へ退ける家ゆえ 毛利お使を出し周防
安国寺を養るの事相考えいと度の
遠御ものかゝれ陽長拙者寄る 夜七帝を
家督ゆえの御ゆ定つゝく和談ゆ成大坂も
毛利遠流さるゝ

一安国寺ハ東福寺の寺領なりしけるを弘安
奥手弓彦方ゟ申しかれる
一長沢大蔵左衛門ハ南天山の後振けるゝ味方
打負きる石井力沼袋横井等之処限
居けるを関ゟ沼田満中る鳥井
武蔵守と打ゟ申ゟ敵人斯所ゟ相寄
使ゟ仁ハ長沢四郎左衛門尉ゟ申ゟ
家ゟ申ゟ切腹ゟ者の御使ゟ
ちゝ
ゟ申ゟ自害ゟ者ゟ
家人奥村左馬丞ゟ
ゟ申ゟ切腹ゟ
金井伊賀守ハ山之内ゟ
たゝみを敷せ大座ゟ
相高蔵ゟ者の外清ゟ
検使ゟ付為
同戸板のゟ
ゟ長沢ゟ
ゟ二年ゟ

切腹せんとたけちゃ申けるは奥村たるとも
家来のことの切腹は一ト通りの品にて不申由
ト仰の自害を奥村に渡し候則其方共
切腹仕る婦人と成けるを哀と
思ひ召し出し婦人醫者を以て療治
しこと後奥村の一門より
合点させ助らる奥村は後に寺に隠居
所なるを知りよりの由

一

一摂津国高槻より大坂本九より石和郡山の堺
本九里半角に郡二の里半波を渡り
義経の石碑を渡る代国備中に長谷より
余人らも城を渡し候由
婦人の者迷事なを渡し候二の
摂津国方より此を渡し候
大坂より此来

則塙甲へきしに自筆にて書しゆゑ
源しゆゑ又大坂へ使を立ハ
増田長盛小相調義申聞つい立の
ものゝ持せくきしに塙と源しゆゑ
のきしに塙ハ乃ち長盛の男ハかゝ
なけゝハ塙ハ妻子あしきと思くハ
成敗ゆゑ死せんとすれ共ハ
敵のまゝぬ先とゝなき妻子をのけ給源ハ

是を乃知妻子ともを切乃へきしゆゑ城おたハ
とてものうるまきしゆゑ後の円源と一所ゆきし
あるし心安討死せんとよきしゆゑハ男ハ
きやうゝ妻子をたゝしゆゑと云ける
乃又源氏女房二の丸へ出給後で法華へ
ものゝ味男を隠して妻子をけゝ
ゝるゝゝ源氏初め後妻子を
ゝるとゝひゝけゝる合ハ隠して妻子を

のけるよハあるべき筋なれ共甲斐守ハ
堺国大事ハ異存なく候ハ、其儀ハ
一同ハ自然康公天下四安治の以後諸大名
以下四礼をなし此時家井右衛門尉
四奏者として自然と人大勢の城家
山口勘兵衛殿ハ人を召加へと云人
なれ共次位
一昔義満ハ治世浦を森山ゆく表せ
大坂に引き来家なれ小西を安国寺も一所に
引き来なれ共中書をん事の浦ハ人
治ア浦加松のり古よりたのお母
四ア殿ハ円府公四服ふ迷ハ成敗
ふ下ハ松よ殿頼ふ小ハ三後淺野右京
ふ長政中ふ日ハの利ハ
殿なるとあさ家ふ所を
中ハ打死をとふと云ハ羽武者の事

大將、御ものまし給るの軍を心かけやや
全隱病みく逐ゝるあゝ次大坂へ入
一合戦をつゝひしよかゝるふ運度を水
名武者れ法華宗おいかりける福島
見を学て治戸板ゝ多極と武士る人ハ
雑とかゝ松ゝ下ゝ駆辱あゝ次
とゝ〻ゝ〻ゝ三人ゝ小袖下ゝ
かゝさせ京ゝ〻ゝ見と手信ゝ

響恵しける和十月朔日三人を伴るのせ
一条の辻より宮所を通り下り寺所へ
ゝ〻ゝ六条御所へ引おうゝ諸人拝とも
六条御所みて様無れ無て敗や
手時七条道場と人のやゝ〻ゝ
波羅人ゝ十念をさゝけらゝ此時と人
ゝ〻ゝ強ゝ治戸浦ハ法華宗みて念佛を
ふ受安國寺ハ禅宗の西寺みて念佛をふ

小西いきりたんをかつらまれ板にしきり
宗旨ハ法華ゝ南無佛と書くるを首へかけ
波ちまいけるを見て十念をふ受と人宅ハ
くゆるもの

一 京隠居小野木縫殿助河尻肥前守を
同日より所敗や他ハ滅されす衆人の
首三条の橋へ出ハ無る

一 赤松左兵衛尉則房ハ切腹石谷清右衛門安房ハ

一 なんぢらもしりぬるを軍人ゝ成

一 石河伯耆ハ兄弟おゝ命の代黄金ゝ枚
京都と所人ゝ所て入道ゝ宗林ゝ奥山
雅楽助と見ゝ同

一 御国常山父ゝ内府公の年ハ七十四歳河
庭住を志く顔一味ハ偏ゝ老老のいたれ
ゝる是宇相ゝ有ゝ是ゝ人ゝ所ゝ所ゝ
のゝ人ゝて父ゝ知ゝ改易

一 高麗ハ後ニ落りけるを沒国事出来
道二の孫兵切腹ト申女人ハ子孫ハ
の敵城ニ籠ル

一 東名城ハ氏家内膳同志摩守元篤ヲ
明渡ス神戸ハ羽柴下総守ヲ
渡す

一 兎山城ハ長谷下野守ヲ明渡ス

一 加賀ハ前田孫四郎ヲ敵一味の約束ニて見
れつゝ忠ゝく軍人や
一 沒国ハ九月十日の合戦ハ
大息ハ居ゝ
更沒国ハ寸河の芳ハ
又人ハ渡ひしゝ大勢
落り三河ハ
ハ家康公の所や
而まて東九月十六日中山ハ
ハ沒国ハ屋ハ

百姓ども落人打殺捕せんと打出る 池田郡
白樫村の矢野五左衛門百姓を引連て来
ぬる思ひの外落人と見事なり此名乗へた
すけよ急ぎし此隠して此者害せ急ぎきと
申池田三左衛門の敵ハ天下之人の此事乃備前
中納言殿之加賀大納言殿の聟にて此秀家
是をとられて此追ふ如くいたしをしてくし
頂りし我ホハ家康公の老臣池田伊賀守之

子息にてあの備前中納言殿も此とぞ某東国へ
下り伊賀守を頼て家康公におもじよくて安堵ハ
うるハしきますましきとて小身にありて隠し
かば伊賀守か相手此目にかゝるこそ幸なれ
とて急ぎ語りて下部男を其三人申付
はや出ハるの男をとめさせ給ふとて中納言殿を乗せ
ハ真申池田をさしを引道まかりと御人
ども捕へしく事度々之引越しへゆき是を

我が親類に病人ありて、此の程に成りて、
よりて、白根村より、はきの木のみを、かいく送
ちらい山甲の景あるのもとに、はきの枝ら
居るの方より、小穴を、あいている、甲斐くに、
を持たこと、あと、余日隠しに、かくて、八月、関東に
下り、仕渡る、後、頼秀、家公、もあるに、
うれと、みたまつ、きくに、たられ、国八、関東へ、下る、秀家
一人、ゆり、世とか、静よ、ちり、くまい、山、の、ゆる

ちり、西国へ、下りくる、其時、一首の、哥を、かきく
みたまつ、ゆ、ゆ、ゆ、

武士は、運を、果しに、ける、国
かくるも、春と、かくも、桜

此人、近衛信尹公の、ゆ、ゆ、ゆ、双の、能書
みて、三人、と、和、又、伝、西国、八、家、の、侍、能、集り
城を、持かゝ、あ、伝、れ、と、甲、玉、へ、ふ、言、葉、一、戦、は
義、勢、と、ゆ、く、薩摩、へ、帰り、て、海津、と、ゆ、み

かられるは人心潟和泉なる吉家のまゝ備前
国作毛国を童まゝ時より知りて言葉
陣ゐを数多の武功の名をあげし人なれば
運傾て日比は武勇を潟物を語人も指以
まうけ命をおしみの程と年九歳にて源
子義経ともうしも九月より召られし潟
へ配流せらる

一長曾我部は四国へ迎下りまゝ城を篭まい
を加る所なる西国射る蜂潟哭阿波る大勢にて
向い〜は一戦ぜとも及城を渡し家人道
〜て法名法蓮と号武術の御みて宰人や

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan